

藝術・教養・人生

龜井勝一郎

雲井書店

藝術・教養・人生

著者 龜井勝一郎

1951年7月15日 印刷
1951年7月20日 發行

東京千代田西神田2-23

雲井書店

刊行 雲井貞長

¥ 120

印刷 山村 榮
株式會社 同 興 社
色刷 戸根木 製本 矢島

目次

藝術に對する私の態度	8
教養に對する私の態度	15
人生に對する私の態度	20
精神形成の苦しみ	28
言葉のいのちについて	60
職業の祕密	70
青春と自殺	87

孤獨について

學問について

美と信仰について

生命讃歌

三人のマリア

藝術と教養と人生に関する斷想

あとがき

214	191	167	155	126	113	99
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

藝術・教養・人生

藝術に對する私の態度

私はこゝで藝術とは何かといった大問題を述べるのではない。藝術に關する定義のやうなものも、一種の徒勞であると思つてゐる。どんな精密な解説も、藝術のすべてを蔽ふことは出来ない。無理にさうすると、美のすがたは濁つてしまふものだ。ゲーテの「ファウスト」第二部で、美しい女を性急につかまへようとするファウストに向つて、天文博士の言ふ言葉がある。「力づくで女子をつかまへる。もう女の姿が濁つて來た」と。藝術に對してはすべて性急は禁もつである。それは一種の、極めて忍耐ふかい勞働と云つていい。制作者の場合も、鑑賞者の場合も。

私は屢々例にとるのだが、博物館における私の経験について語つてみよう。博物館には、云ふまでもなく一流の藝術品が並んでゐる。彫刻、繪畫、陶器といったもの、平生見られぬものを任意に鑑賞出来るのだが、その自由を、私は果して完全に享受してゐるだらうか。またこれは自由といふものであらうか。多くの場合、無數の一流品を次々と眺め、めまぐるしく館内を巡つて、非常な疲勞を感じつゝ、結局何も見なかつたやうな氣持で出てくるものである。これはどういふことだらうか。

たつた一枚の繪でもいゝ。自分の好むものの前に立つて、五分間これを凝視すること。たゞそのためにだけ博物館は訪れるものだといふことを、私は忘れがちなのである。五分間とは實に短い時間だ。しかしその間全身全靈を傾けて眺めつゞけるといふことは、容易なことではない。十分間つゞけたら卒倒しさうになる。つまりそれほど激しい肉體勞働であり、この種の肉體勞働だけが眞の頭腦勞働だといふことを私は言ひたいのである。一流の作品に對しては、鑑賞者は汗を流すべきだ。藝術とはまづ汗を流すものである。大急ぎで博物館を巡つて、勞力なく多くのものを見て、たしかに見たと思ふその錯覺から離れなければいけない。美術に對しては眼の訓練が必要である。思考力も感覺もすべて眼に集中される。落着いた凝

視、そのくりかへしといふ當然のことを、今の我々は實行しない。同時に、様々の藝術に對して好奇心をもつのはいいことだが、その好奇心が、博物館では分散状態におかれる危険をも指摘したい。

博物館はたしかに便利な設備である。保存のためにも、研究のためにも、大衆化のためにも、なくてはならない設備である。しかしその中で、すべての藝術は若干不具化されるといふ點を考へておかなければならない。たとへば佛像は、元來佛殿に安置されて拜むものであり、茶碗は茶を飲む道具であり、刀劍は人を殺す武器であるか護身用のものである。各々の本來在るべき場所、即ち日常の信仰とか生活から隔離されて、博物館のガラスのケースの中に陳列されることは、それに對する鑑賞に制約をもたらす。これは重大なことだ。茶器は手にとつて眺め、愛撫し、それで茶を飲むことによつて、はじめて我々と親しい肉體的關係に入る。さういふ美的鑑賞の態度が日本では發達した。

繪は、ふすまもあり、屏風もあり、掛軸もあるが、すべて日常の生活にとけ入つたものとして愛好されてゐた。新しい繪にしても、自分で買ひ求めて、自分の座右においたとき、はじめて眞の愛着が湧くだらう。この愛着以外に藝術の「わかる」方法はないのだ。むしろ大

、變な費用が必要で、我々には不可能なことだが、不可能ではあつても、眞實はこの方にあることを知つておくことは大切であるまいか。博物館でくりかへし眺めるのはいい。たゞそこには私の謂ふ不具性があるのだ。不自由があるのだ。ヴァレリーの「博物館の問題」の中に、陳列された美術品について次のやうな言葉がある。

「……繪畫も彫刻も棄て子である。その母親は死んでしまつたのだ、母親たる『建築』が。この母親が生きてゐる間は、『繪畫』にも『彫刻』にもその占むべき場所やその仕事や守るべき制約を與へてゐたのだ。彷徨ひ歩く自由は拒まれてゐたのである。『繪畫』も『彫刻』も、その占むべき空間を持ち、明確に限定された光明を受け、その主題、それと聯結するものを持つてゐたのだつた。母親が生きてゐる間は、『繪畫』も『彫刻』も、自らが何を欲してゐるかを心得てゐたのだつた……」

この深い嘆きは、博物館の一流の藝術品なるものの、その處を得ない雜然たる紛糾に對して發せられものである。或はそれら尊い財寶を、我々が、博物館として持つといふ近代の不幸に對して。むろんさうかと言つて、今更どうすることも出来ないのも事實だ。あきらめて博物館から出る。しかしこの「あきらめ」はいつまでも心のしこりとなつて、藝術への正常

な愛を、夢を、育くんでくれるやうにも思はれる。ただ惧れねばならぬのは、博物館のかうした不幸によつて養はれた眼が、博物館以外にある古寺古佛に對してもそのまゝ向けられやすいといふことだ。

文學の場合はどうか。印刷術の發達は、一流の作品を、自分の手もとにおくことを可能にした。美術品とちがつて、少くとも自分の欲する時、自由に讀むことも出来るし、わが所有としてくりかへし熟讀することも出来る。しかし私がいま述べた博物館と同様の不具性あるひは危険を伴つてゐることを指摘したい。それは入門書や解説の普及によつて、何らかの先入觀念あるひは偏見のとりこになりやすい状態と、あまりに多くの知的財寶のために、心が分裂状態におちいるか分散状態になりやすい點である。

私は入門書や解説を否定しないが、それは讀者がそれにとらはれず、一の參考ぐらゐに考へて接する場合にかぎる。詩や小説に對しては、たとひ難解であつても、素手でとびこみ、翻弄され、迷ひ、自ら額に汗してつきつめてみるものが大切である。解説なければ不安心だと思ふのは心の一種の衰弱ではあるまいかと私は思ふ。尤も解説の性質によつては、讀書の

上に大へん役立つこともあり、また古典や外國作品の場合、説明や註解の必要なものたしかだが、それをみても、心の中で一應それを捨てることが大切である。

私のとくに強調したいのは、文學史に屢々みられる分類と限定と定義の虚妄である。一家は一個の獨自な運命である。社會的條件や文學思潮の影響はまぬかれないが、彼をして獨自のものたらしめた原因をさぐり、彼がどのやうな個有のテーマを提出し、いかに答へようとしたかを、個人に即してみつめなければならない。私小説、風俗小説、社會小説、その他無數の分類や定義があるにしても、それにとらはれてはならない。一口に自然主義文學とよんでも、その中の作家にはみな夫々の個性がある。同時代人としての共通點もむろんあるが、そこでその人を限定してはならない。或る主義やイズムを以て個定化してはならない。

平凡な言葉だが、こゝでも一作家に對する愛着こそ問題である。批評の原理は様々あるにしても決定するのは愛着といふことである。そして一作家の全集をよみ、その出發、成育、成熟、死を凝視し、そこにその作家の肖像を再現しうるならば、それだけでも大へんなことであり、藝術鑑賞を深めるにも擴大するにも、畢竟はかういふ點から出發する以外にない。個人的な戀愛の深さから、世の多くの愛の深さを知るやうに、一個の美術品、一つの作品、

それへの愛着からすべては發する筈だと私は考へてゐる。

藝術の世界は廣大無邊である。各人の好みといふものがあり、そこに執着することはもとより大切だが、それだけが絶對だと獨善的になつては危険である。東西古今にわたつて、どれだけ我々の知らない美があるかわからないし、これからまたどんな美が創造されるかも豫想出来ない。一つのものに愛着するとともに、眼を廣く開いてゐなくてはならない。しかも好奇心が分散状態にならぬやう、一歩づゝゆつくりと踏みしめて行くことが大切だ。人間の一生はあはれにも短い。一生の間にどれだけのものを自分のものとすることが出来るか、心細い次第だが、一歩が直ちに終局につながることも覺悟してゐなければならぬ。芭蕉は自分の一句一句は悉く辭世だと云つたが、今日愛着した一作が、そのまゝ我々のすべてとなり最後となるかもしれないのである。

教養に對する私の態度

教養といふ言葉は、文化といふ言葉と同じやうに、今の日本ではひどく曖昧に、また輕薄に用ひられてゐる。たとへば文學、音樂、映畫、その他様々のハイカラな習慣風俗について、ひととほりの知識をもち誰と話してもうまく調子をあはせる社交人、小市民的な幸福感を夢みてゐる人、さういふタイプが眼に浮んでくる。PTAなどの有閑マダムがよく「教養」といふ言葉を使ふ。むろんその反對に、學問を深め、多方面の知識を有し、普通の我々にはとてもわからないやうな難解きわまる論文など書く人も、教養人とみなされてゐる。

教養といふ言葉は、大正期から用ひられたもので、その以前には、修養といふ言葉が主として使はれてゐた。文化といふ言葉の前には、文明開化といふ言葉があつた。時代によつて